

人格の同一性と質的連続性：ノージックの外在説の検討

中西 豊

問題設定

人は身体や精神の因果的連続性や、別の時点に存在する個体間の類似性をたどって、人格の同定をしている。この連続性や類似性は、人格の同一性に対してどのような関係に立っているのだろうか。本論文ではこの疑問に対する既存の回答として外在主義とよばれる立場を検討し、これらの理論の有効性を評価する。

そこで最初に、デレク・パーフィットの還元主義を導入として記述し、問題にしようとしている事柄を明確にする。概念とその手がかりを形成する質的な連続性は両立しないという彼の主張を継承した上で、外在主義のメリットを捉えたい。当問題でのこの立場は、ある時点に存在する人格が別の時点に存在する人格と同一であるかどうかを確定することは、この二人が心理的／物理的に関係しあう仕方のみでは決まらず、これら以外の全てのもの（特に人格）にどのように関係しているかで決まるという見解である。そこでロバート・ノージックの「至近連続体説(Closest Continuer Theory)」を取り上げ、内在主義からの批判を検討しつつ、その理論的な有効性を考察したい。

1 パーフィットと還元主義

「人格の存在は身体が存在することに存し、また思考や経験などの精神的、物質的出来事が連続して起こることに存する(Parfit in Martin & Barresi 2003: 294)。」そして、「人格は身体や思考やその他の経験を有する存在者である。」これらの主張が構成的還元主義(Constitutive Reductionism)の基礎的な前提を成す。

その要諦は、人格が連続的に変化してゆく身体と継続する思考や経験からは独立したものと扱われながら、人格が存在するかどうかという点においては、その存在はこれらにのみ存しているということである。

パーフィットは、もし人が人格の同一性に与える基準として魂やデカルト的な非物質的実体に訴えないとすれば、人は次の主張を認めることが出来るだろうと考えた。この立場は、人格が思惟実体や魂などの非還元的な存在ではなく、異なる時点で起きた出来事の経験や思考を同一の人格に帰するとき、人格が同一性に関係しない事実には存していなければならないと主張するのだ。そして、そういった事実が時間の流れの中で連続的に生起するならば、パーフィットは次のことも認めてよいと考える。「人格の同一性は、物的かつ／または心的連続性にのみ存する(Parfit in Martin & Barresi 2003: 295)。」

構成的還元主義は、パーフィットによって次の様に説明されている。わたしは、ある丘の上に木がまとまって立っていることを知っているとする。その後、それを「雑木林」と呼ぶことを学んだ。このときわたしは何か新しい事実を獲得したわけではなく、単に使用している言語について新しい情報を得たのみであろう。これと同じこととして、人格の場合はある人格についての事実とは、身体的または心的な事実のみであり、人格の存在や同一性についての正しさは、それらの事実によって保証されるというのだ。その理由は、人格やその同一性を概念的に理解したからといって、我々に直接与えられている事実について、そこから何か新しいことを我々は教わらないが、それらの理解はこうした同一性についての事実についてのものそのものだからだ。

この還元主義の見解に立てば、分裂のパラドクスとも呼ばれる次の問題に一応の解決を与えることが可能だろう。ここで以下に人格の同一性の問題へ典型的に与えられパラドクスを出現させる思考実験を描写する。タロウという人物が瀕死の重傷を負って、左半球の脳以外が全て破壊されてしまった。このときタロウには新しいクローン身体が用意されており、しかもその脳は取り除いてタロウの左脳を移植する事が可能であった。さらに、このケースでは左脳と右脳の機能の差は実質的にないことにしておこう。こうして左脳をクローン身体に移植して生まれた新しい人間をサエモンとする。このことは、右脳以外が破壊されてしまった場合でも同様であり、その場合タロウの右脳を備えたクロー

ン身体の人格をウノスケと名付けた。問題は、両者のケースでタロウが手術後の人格と同一であるかどうかである。

この想定において、手術前後の人格が同じかどうかについて、端的な不一致があるだろう。というのも、人格とはまさに同じで「ある」か「ないか」であり、その答えは確定的でなければならない（結果として現れた人物が、部分的に私であるなどということはいえぬ）。脳半球の移植前後の人格が同一と考えるならば、左脳移植後はタロウであり、右脳移植後もタロウである。ところがこの想定は、両脳半球を移植する手術をした場合を想像すれば、どちらもタロウであると考えたくなる人格が同時に2人存在してしまうことになる。この空想実験において、ウノスケとサエモンが別々の個体である以上、まず2人は同一人物ではあり得ないとする直感是非常に強力なものであるから、想定が誤りであるか、あるいは、それが正しいとしてもどちらかのみをタロウと出来る根拠を持たない限り、同一性概念について我々が当然満たすべきだと考えている推移性を犯すことになる。

パーフィットの場合、先の還元主義が前提として認めるところによると、手術前と手術後の間にある身体的・心理的連続性の事実しか我々には手がかりとして与えられておらず、連続性の程度が完全な場合を100として、もし与えられた状況でこれに対して20であるならば両者が同一とは認められないが、21ならば認められるといった境界をどのような場合にも確定的に持ちえない。術前のタロウと術後のウノスケとの間に、そして術後のサエモンとタロウの間にある身体的類似性や記憶などの連続性の程度は、0から100の間でいかようにも想定されるが、確定的な回答を要求する同一性については様々な程度の連続性に対してどう答えたらいいかに迷う他ないだろう。そうはいっても、どのケースにも同一性は確定的な回答がなければならない。しかし、それが我々には出来るだろうか。例えば、ウノスケとサエモンが必ず同一性の主張に基づいて判断することができるだろうか。これは想定上の全てのケースにおいて結果の人物のどちらもがタロウであることを主張する可能性があることから、結局引き起こされるのはおそらく血なまぐさい人格の奪い合いである。そして、その勝者に人格の同一性を帰属させることになるだろう。しかし、これはパーフィットにとってはあり得ないことなのである。ところで、私にはこの奪い合いとい

う論点が同一性の興味深いポイントを含んでいるように思われるが、詳しくは別の考察に譲ることにしたい。

パーフィットの議論は、結局我々は同一性の疑問には確定的に答えられないと考えなければならないという結論に行き着く。単線的な脳半球移植のケースで、結果として現れた人物をタロウと同一であると見なすかどうかというのは同一性概念の与え方の疑問である。しかし、この疑問について確定的に答えることが出来ない以上、もし法的な目的などで確定する必要がある場合でも、我々が現に日常生活において人格を同定する際も、それは単に恣意的な決心と呼べる程度のものに過ぎないのである。だからまして分裂のケースで、ウノスケとサエモンのどちらもタロウであると言うことなど出来ないのである。

2 ノージックと至近連続体説

以上に見た同一性概念が同一性の問題にとって全く重要ではないという議論に、わたしが直ちにうなずけられないのはなぜだろうか。あらゆる場面で、確定的な同一性の判断を我々が持ちえないという考えは、一見するともっともであるようにも思える。我々はおそらくどの場面でも、大体の類似性や記憶などを手がかりにして、過去の彼は彼自身だと判断しているに違いない。しかし、時間的・空間的に個体に変化するにも関わらず同一であり続けるとは認識論的に空虚で、概念的に不可能であると言い切ってしまうことに、言い当てていない感じを持つことは否めない。脳データのコピーやクローン技術が可能になり、分裂や生体情報転送の問題に直面した時、我々は自分たちの持っている連続性の基準を新たな状況に適合させるかもしれない。また、同一性の概念が不可能だとしても、依然、人が判断に迷う場面で重要だと考えているのが同一性であることは間違いないように思える。そして、人格の通時的同一性の問題が解決される為には、恣意的な決定でしかないところの同一性に与える証拠が、我々によっていつも無差別に与えられているわけではないだろう。

以下に見るノージックの議論は、我々の同一性への問題関心に対して現実的・心理的な枠組みを与えることで一つの答え方を提示している。彼は外在主

義の立場から分裂ケースのパラドックスに対して、パーフィットとは異なる解決を与える。彼の場合、我々は異なる時点の人格が同一であることを、単にそれら自身の心理的・身体的連続性の程度から把握しようとするのではなく、右脳移植側の個体と左脳移植側の個体のそれぞれがどの程度に移植前の人格の性質を引き継いでいるかを把握することにおいて同一性を帰属する点を、パラドックス解決の主眼に定める。以下は、同一性のアポリアを示した古典的事例であるが、ノージックの解決方法をこれによって典型的に描写できる。

「テーセウスの船のパラドックス」：テーセウスの船は、就航以来部品をドッグ補修などで交換しつつ航海を続けていた。長い航海で就航時の部品の一切が新しいものと入れ替わった後でも、この船は就航時との統一関係を持つだろう。ところがここで、就航時の部品をすべて倉庫に保管していたとして、それらを再び最初の船を構築していた通りに再現して就航させたとしよう。このとき、同質的であるだけでなく、最初の就航時と関係のある二隻の、いったいどちらが就航時と同じ船とされるのか？

この事例を記号化して、継続して航海してきた船を $S1$ 、就航時の部品で新たに作られた船を $S2$ とし、最初の就航時を So (エスオー)とする。さらに、ここでは (x,y) によって、 x の船と y の船が同一の船であることを表すとする。このパズルはそれまで航海してきた $(So,S1)$ に対して、新たに $(So,S2)$ である可能性が出現する。我々は $(So,S1)$ と $(So,S2)$ のどちらとするにも、ある根拠を与えることができるように思える。しかし、我々は、二隻の船が数的な意味で同じ船だとは言わないだろう。そこで、 $(So,S1)$ か $(So,S2)$ かのどちらかを選択しなければならない。

至近連続体による説明は、我々がこのような判断に迷うケースではとりわけ比較考量を行うという事実に伴組みを与えるものである。比較考量は、各時点の船が互いに持つ質的側面や時間的空間的連続性を参照することによってなされる。船のパズルで考量の対象となる性質について、ノージックは二つ挙げている。部品の継続性を伴った時空的連続性と、部品の物的な同質性である。パズルの解決は、 So と $S1$ のペアと So と $S2$ のペアのそれぞれの側面を考量した

上で、より近接していると考えられるペアが互いに至近連続体であると見なす。例えば、S1がSoにより接近していたならば、S1をSo至近連続体と呼ぶ。

もし、以上のような複数の側面にわたる両ペアの考量の結果、両者に全く差が見いだされない時は、S1とS2の両方にSoとの連続性が無いと判断される。したがって、(So,S1)と(So,S2)がそれぞれ至近連続体の関係を持ちながら、両者が別の船であるとする考え方もここでは否定される。つまり同点首位の場合は、S1もS2のどちらもSoとは別の船であることになる。もちろん、このような場合は、考量される側面となる性質をさらにきめ細かく見ていく事によって明確に至近性の差が見いだせるようになるかもしれない。このことは、対象となっている存在者の種類によって変わってくる。

ノージックは、時点 t_2 の y が t_1 の x と同一の存在者なのは、それが x の至近連続体であるときだけであると述べることによって、至近連続体説を同一性の必要条件であると見なした。連続性に対する比較考量は、質的同一性や類似性だけでなく、性質の因果的なつながりも含む。すると結局、至近連続体説は、次のような主張としてまとめる事が出来る。時点 t_2 の y と、時点 t_1 の x が同一であるのは次の時、またその時に限る。すなわち、 y の性質が x の性質に起因して生じ、かつ、 x に対して y 以上か同等に等しい関係が存在しない(Nozick: in Martin & Barresi 2003: 99)。

つまり、至近連続体という形での連続性がないところでは、同一性もあり得ないとするのがノージックの理論の中心的な主張であり、さらに、我々は現実に、たとえそれが単に心理的な説明であっても、ある人格と別の人格の間に同一性を見いださないよりは、見いだす傾向にあることを説明していると考えられる。

3 至近連続体説から見た内在主義、内在主義から見た至近連続体説

本章では、内在主義と前章で説明した至近連続体説相互の批判を検討したい。まずノージックの内在説への対応を考察する。人格の同一性が身体的連続性のみによって把握されると主張したバーナード・ウィリアムズの議論が彼の内在

主義批判の対象となる。ウィリアムズの原理を、ノージックは以下のようにまとめる。

[1]もし、時点 t_1 の x が後の時点 t_2 の y と同一の個体ならば、このことは x と y の事実と両者の関係のみによって決められうる。他のいかなる存在物の事実も、 x と y が同一（の個体の部分）であることについて関連がない(Nozick in Martin and Barresi 2003: 94)。

仮に y とは別の存在者が x に対して y と同様の関係に立つならば、[2]の原理を犯すことになる。それならば、 x と y だけが R 関係の下にあることが、どうやって x と y のみで決まるのかと疑問を呈することができるだろう。そこでノージックは、ウィリアムズが[1]から帰結的に次の原理を導入すると理解する。

[2]「もし、時点 t_2 の y が、時点 t_1 の x との R 関係が成立している故に、 x と同一（の個体の部分）ならば、 x と R 関係をもつ他のものが時点 t_2 に存在することはありえない。したがって仮に、こうした関係をもつ z が時点 t_2 に存在するならば、 z も y も、 x と同一ではない。実現していないにも関わらず z が存在できる可能性があるところでは、 y は x と同一ではない。すくなくとも、両者の関係は R ではない(Nozick in Martin & Barresi 2003: 94)。」

例えば、入力と出力で一对を構成する人間転送機械がやや離れた位置に置かれていて、そこへある人物が入力側に入ったとする。我々は入力機械へ入った人物と同一人格の人物が、転送によってもう一方の出力機械から出てくだろうと期待する。さらに出力機械を一台加えた別の場合を想像しよう。この時は、再び人物が一つの機械に入って二つの機械から同時に出てくると認めることには直感的な抵抗があるだろう。しかし、ウィリアムズは、二つの例は両方とも人格の同一性の見いだせないケースと考える。二台の出力機の例では確かに[2]の原理が我々の直感に根拠を与えている一方で、最初の単線移動の場合でも、この原理の禁止している第3項 (z) の存在をすでに含んでいるがゆえに、同一人格を期待することは誤りとなる。

ところで、そもそも[2]は果たして内在性の原理と言えるのだろうか。たしかに、 x に対して R 関係に立つものが一意的に決まるとき、 xRy (x と y が R 関係にある) と xRz が同時に成立していることを認めることは不可能であろう。しかし、内在性の原理を墨守するならば、両者が同時に成立していることすらも

認めなければならないように思う。なぜなら、 xRy の成立にとって xRz の成立／不成立は一切関係がないというのが原理[1]で提示された内在説の核心のはずだからだ。

原理[1]は、人格の同一性の証拠となる各時点の存在者の関係が、それら自身のみで決まらなければならないことを明確に述べている。ノージックの至近連続体説はこの考え方に反対するものである。彼の狙いは、その原理に反対した上で、これから導かれる[2]の原理も否定しようというものだ。しかし、[2]に準ずる例が、[1]に違反するということを論拠にして[1]を否定し、[2]もこの原理から導かれた故に否定されるというノージックの議論は、内在説に対する批判として妥当だろうか。

マーク・ジョンストンは、むしろノージックの批判を逆手にとって、 x と y が同一で、しかも x と z が同一でありながら両者が同時に違った性質を持つ存在であり得ると考えた。言い換えると、彼は xy と xz のペアがそれぞれ同一でありながら yz は同一ではないという議論である。ジョンストンの見解は、したがって[2]に矛盾する。しかしながら、[1]の内在性の原理には反しないのである。

ジョンストンは一人称的視点から同一性の議論を展開し、どこまでパーフィットの議論と自分の議論とすりあわせられるかを探求しつつ、パーフィットの理論から新たに外在主義とは両立不可能な内在主義を提示しようと試みた。彼はパーフィットに従い、同一性概念が重要でない点を継承する。しかしその一方で、今の私が未来の人格に関係していることを、内在的観点から証明することで両者の関係の一意性を確保しようとした。その基本的な見解は、「自己関心(self-concern)」という概念を使って、現在私が未来の私に対して向けている関心が非派生的な時にのみ、現在の私は未来の人格との同一性を持てるということである。非派生的な自己関心とは、彼によれば、私が関心を抱く範囲の内側にいる人物（家族、友人、近所の人等々と未来の自己）が抱える幸不幸を気遣うとき、その仕方が気遣っている当の人物以外への関心に寄与するからという理由によるのではない場合を指す。自己関心の範囲内に家族や友人等とともに、未来の自己も含めるのがジョンストンの特徴といえるだろう。そして、せいぜい一人の未来の人格が、現在の人格の心的・身体的生活を引き継ぐだろうという未来志向的な想定から、彼は内在性の原理を次のように書き換える。「未

来の人格に特別かつ直接に関係があることの理由を人が持つかどうか、その人自身とその未来の人格の関係の内在的観点に依存している(Johnston in Martin & Barresi 2003: 280)。」

では、これから当面の課題である、内在説からの至近連続体説に対する反論を検討するため、ジョンストンのノージック批判を見ていきたい。至近連続体の理論の内在説に対する一定の強みはジョンストン自身が、“Fission and the Facts”の中で確認している。それによれば、パーフィットの行った内在性の定式化「未来の人格が私であるかどうかは、私の現在の人格との関係についての内在的な特質のみで決まる。他の人々に何が起きているかに依存することは出来ない(Parfit 1984: 267)。」やデイヴィッド・ウィギンズの内在性の原理(ウィリアムズの原理[1]とほとんど違いがない)などは、分裂問題についての至近連続体説を排除できない。至近連続体説はタロウのケースに対して、脳半球移植で分裂した後の2人の人物のどちらもタロウと同一ではないと結論するだろう。なぜなら、ウノスケとサエモンはそれぞれタロウのクローン身体と脳半球によって構成される。さらに、左脳と右脳の間で機能の差がないことも前提されるならば、どちらも細かい比較考量から程度の差を連続性に見いだすことが出来ない。また重要なことだが、どちらかがタロウでありえたとも、この説からはそれを言うことが出来ない。なぜなら、分裂後のどちらもタロウと同一ではないならば、どちらかが同一でありえた可能性はないのだ。つまり同一性の必然性に違反するのである。ウィリアムズやパーフィットの内在説はいずれも、タロウの脳半球が2人の身体に移植されて分裂する場合と、どちらか一つの脳半球のみを別の身体に移植した場合との比較を促してきた。一方で、至近連続体説と同一性の必然性に基づけばこの比較は不可能にすることが出来るのである。つまり、原理[1]やパーフィットの定式では、左右の脳半球による分裂のケースを、片半球の移植を二回繰り返したものと捉えることで、両方の場合を比較できるようにするのだ。一方、至近連続体説と同一性の必然性に基づけば、前者の場合では等しい競争者がいることによって至近連続関係が存在しないので、左脳と右脳のどちらの受け手も移植前のブラウンの人格と同一とは考えられないが、枝分かれしない後者では移植後の左脳の人格を移植前のブラウンの人格と同一であると考えることが出来る。至近連続体説ならば、二つのケースを比

較不可能な事例とすることが出来るため、ケースが真っ向から衝突することが回避できているのだ。内在説の議論がこの点で主導権を握るには、両方の場合についての考慮のもとで、例えばサエモンがどちらの状況でも同じ人格であるという主張を支持する議論が必要になるが、至近連続体説はこの要請をうまく回避している。結局、内在的観点から xRy の y が一意的に決まらないため、[1]のような内在性の原理では他に、どうしても[2]のような xRz が同時に成立するのは不可能であるとする別の原理を要求することになる。これがパーフィットやウィリアムズの内在説の特に分裂ケースで露呈する弱点なのだ。

この点を認めた上で、ジョンストンはそれまでとは別の仕方での内在主義擁護を試みる。彼はまず、誰もが認めるだろうと思われる原理に、内在性の原理を付け加える。

[3] 二つ以上の独立した人間身体によって同時に構成されているような人格は存在しない(Johnston in Martin & Barresi 2003: 272)。

[4] 例化した性質において、それ自身が空間的に分離しているような人格は存在しない。

これらの原理は至近連続体説とも整合的であると思われる。ジョンストンの改変した内在性の原理は、

[5] あるプロセスがある人格の生存を確保するかどうかは、そのプロセスの内在的特徴に論理的に依存する。すなわち、そのことは別の時点、別の場所で起きている事には依存しない¹。

彼は通常の実践においては[3]、[4]と内在性の原理[5]が正しく現実と合致することによって、ノージックが自分の理論の地位を誤ったということを示唆している。彼によれば、至近連続体説は、原理[5]と対立しているが故に、単に我々が通常人格の同一性を見いだす実践の拡張なのである。(この実践は、せいぜい多くて一人の未来の人格が、現在の人格の心的・身体的生活を引き継ぐだろうという非派生的で未来志向的な自己関心に原理的に与えられる想定に基づくものである。)そして、この拡張は我々に対して強制力が無い。[3]～[5]の三つの原理は、我々が依然明らかとはいえないような見解(例えば、我々は遠隔転送を生き延びる)を付け加えない限り、単線と分裂の両ケースについての記述と不整合ではない。このことを分裂ケースについて具体的に説明すると、既に述

べたように、これらの原理はまず[5]ゆえに、ウノスケとサエモンのそれぞれがタロウであることを認める。しかし、[4]によれば、分裂後の二人は同一の例化された性質を持つことはない。また、[3]によって、二人が同一人格を持つことも不可能である。xを分裂前のタロウとして、yとzがそれぞれウノスケとサエモンだとすると、 xRy と xRz が同時に同じ場所で成立していると言及することなしに、それぞれの同一性を認めることが出来る。しかも、我々の直感に反する zRy は成立していないのだ。

要するに、[3]～[5]は至近連続体説と矛盾するが、二つのケースの記述と整合的である。さらに、我々の日常的な同一性に関わる実践では、至近連続体説に従わなければならない場面はないので、結局、この理論は単に我々の同一性に関わる実践全般に対して特殊な状況だけに適合されるようにデザインされたものに過ぎない。したがって、もし我々が、我々の実践がそのままの形でタロウのケースに適應されるならば、我々は内在性の[9]の原理を採用すべきなのだ。

これに対する外在主義からの反論としてまず指摘したいのが、この理論は内在説の理論的難点を補う為に出された、非常に極端なバージョンであることだ。現実問題として我々はジョンストンの認める状況に耐えられるとは思えない。以下に述べる難点は既に取り上げたものだが、分裂ケースを生体情報転送装置で考える時、機械と資源のある限り、いくらでも多重複製を考えることが出来る。転送前までの共通の過去を持つ多数の人格が一人称的視点から全て同一性を主張した場合、我々は結局連続性の程度を比較考量する何らかの枠組みを持つか、全ての人物を全くの別人とするかしかないのではないか。

また、これまで見てきたところ、至近連続体説が直感に忠実で、同一性の特徴である推移律に違反しない理論構成を持っていることが確認された。しかし、ジョンストンの内在説は、人格が内在的視点に立つ限り推移性に違反しないように構成されているものの、それはあくまでも人格に対する外在的視点を持たない限りであるように思われる。さらに、人格は未来指向的な関心のみならず過去指向的な関心も持つだろう。ウノスケとサエモンそれぞれが自分をタロウであると主張する時、二人の主張は過去の自分自身に対する関心も含むと思われる。そして、自分以外の別人が自分自身と共通の過去を持つ時、人は外在的

視点を自ら持たざるを得ないのではないだろうか。

結論

本論文の全体として、論者が分裂ケースをどのように解釈し、人格の通時的同一性の問題に立ち向かったかを外在主義と内在主義の対立点を鮮明に打ち出しながらまとめた。

パーフィットの議論は通時的な同一性の分析に対して概念上の明確化が為された点で大きな貢献があったと言えるが、これだけでは、まだ我々がいかにして変化してゆくものを同一の存在と見なすのかについて、満足な答えが得られたとは思えない。すくなくとも、パーフィットの内在主義では、至近連続体説を退けることが出来ない。この問題に対して、我々の実践に心理的な枠組みを与えて答えようとしたのがノージックだったと言えるが、彼の理論の利点は、比較考量という論点から、出来る限り多数の性質を取り上げて、同一性の判断により多くの証拠を与えることが出来ることであると思われる。

註

- ¹ 彼の原理[5]は、プロセスに自己関心に基づいた各時点の人格同士の内的結びつきが付随するという見解なのだが、これをジョンストンがどのようにして論証しているかという点、可能世界概念を用いている。これについては私の勉強不足もあり、後の考察の課題としたい。

文献表

アリストテレス[1959]『形而上学』上、岩波文庫。

Belzer, M. [2005] “Self-conception and Personal Identity: Revisiting Parfit and Lewis and Lewis with an Eye on the Grip of the Unity Reaction”, in edit. E. F. Paul, F. D. Jr. Miller, and J. Paul, *Personal Identity*, Cambridge: Cambridge University Press.

Hume, D. [2005] “Of Personal Identity”, in edit. K. Atkins, *Self and Subjectivity*, Oxford:

Blackwell Publishing.

飯田隆[1995]『言語哲学大全 III 意味と様相 (下)』、勁草書房。

Johnston, M. [1989]“Fission and the Facts”, in *Philosophical Perspectives*, Vol. 3, Philosophy of Mind and Action Theory, pp. 369-397, Blackwell Publishing.

——[2003]“Human Concerns without Superlative Selves”, in edit. Martin, M. and Barresi, J. *Personal Identity*, Oxford: Blackwell Publishing.

Lewis, D. [2003]“Survival and Identity”, in edit. Martin, M. and Barresi, J. *Personal Identity*, Oxford: Blackwell Publishing.

Martin, M. [2003]“Fission Rejuvenation”, in edit. Martin, M. and Barresi, J. *Personal Identity*, Oxford: Blackwell Publishing.

野矢茂樹[2002]『同一性・変化・時間』、哲学書房。

Nozick, R. [2003]“Personal Identity through Time”, in edit. Martin, M. and Barresi, J. *Personal Identity*, Oxford: Blackwell Publishing.

Parfit, D. [2003]“Why Our Identity Is Not What Matters”, in edit. Martin, M. and Barresi, J. *Personal Identity*, Oxford: Blackwell Publishing.

——[2003]“The Unimportance of Identity”, in edit. Martin, M. and Barresi, J. *Personal Identity*, Oxford: Blackwell Publishing.

Perry, J. [1975]“The Problem of Personal Identity”, in edit. J. Perry *Personal Identity*, Barkley and Los Angeles: University of California Press.

Shoemaker, S. and Swinburne, R. [1984] *Personal Identity*, England: Basil Blackwell. (寺中平治訳、『人格の同一性』、産業図書、1986。)

Sosa, E. [2003]“Surviving Matters”, in edit. Martin, M. and Barresi, J. *Personal Identity*, Oxford: Blackwell Publishing.

Williams, B. [2003]“The Self and the Future” in edit. Martin, M. and Barresi, J. *Personal Identity*, Oxford: Blackwell Publishing.

(なかにし ゆたか／東京大学)